

## 大学生と『論語』との新しい出会い

富山 敦史

概要：『論語』について、大学生はどのような認識をもっているのだろうか。これまでの学校教育において『論語』をどのように学んできたのだろうか。本稿では、道德臭が付きまとう『論語』の章句ではなく、試行錯誤の中に生きた孔子の姿、弟子たちと生き生きと真剣に関わる孔子の語り、喜怒哀楽を抑制することなく大なる振幅を体現した孔子の生き様に関わる章句を授業の中で示し、学生自らが選定した章句を解釈し、それを教材化していくことで、学生たちがどのように『論語』や孔子についての「見方」や「とらえ方」を変容させていったのかを報告する。全15回の授業を通して、将来教育者を目指す学生たちが『論語』を通して変容し、「学ぶこと」「教えること」への自己認識を深め、児童生徒に対する眼差しの深化を図りたいと考えた。

キーワード：『論語』，孔子，大学生，変容

### A new encounter between college students and “The Analects of Confucius”

#### 1. はじめに

大学生は『論語』や孔子にどのようなイメージを持っているのだろうか。授業開始にあたり、簡単なアンケート（受講者24名）を行った。以下学生が抱くイメージの概要を示す。なお、アルファベットは学生を識別するためのものである。

##### (1) 『論語』について

- ・ A 孔子と弟子によってつくられた書物。
- ・ KJ 難しい文章（よくわからないもの）。
- ・ B 堅い，自分とかけ離れている。
- ・ M 単なる説話（説教）。
- ・ R 『論語』は権威ある書（孔子は聖人君子なので）。
- ・ I 道徳を中心とした堅い印象で入り込み難い。
- ・ L 『論語』は教訓，きれいごとでつまらない。
- ・ N 『論語』には一つの正しい解釈がある道徳の教科書のようなイメージ。



- 為政 第二 02-11 子曰、温故而知新、可以為師矣、
- 為政 第二 02-15 子曰、學而不思則罔、思而不學則殆、
- 為政 第二 02-17 子曰、由、誨女知之乎、知之為知之、不知為不知、是知也、
- 為政 第二 02-24 子曰、非其鬼而祭之、諂也、見義不為、無勇也、
- 里仁 第四 04-25 子曰、德不孤、必有鄰、
- 顔淵 第十二 12-02 仲弓問仁、子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施於人、在邦無怨、在家無怨、仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣、
- 子路 第十三 13-23 子曰、君子和而不同、小人同而不和、
- 衛靈公第十五 15-21 子曰、君子求諸己、小人求諸人、
- 衛靈公第十五 15-24 子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎、子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人、
- 衛靈公第十五 15-30 子曰、過而不改、是謂過矣、

教科書に採用されていた章句は以上の 12 章句である。具体的な章句を見てもわかるように「君子」「小人」、また「徳」「恕」など、概念を定義することが難しい言葉や、また、発言の前後の状況がよく分からないもの、これは『論語』の特性でもあるが、が多く採用されている。もちろん教員が、孔子が生きた時代の背景や孔子の生涯を概観することが前提と考えられているが、それを教員自身が理解し、その本質的な部分を整理して生徒たちに正確に伝えるということは、かなりの専門知識が必要である。また、そのようなことができる余裕が現場にはない。だから、通俗的に辞書的な言葉の解釈に終始しがちとなり、生徒の体験に置き換えて章句の意味を考えてみようとはいっても、自分たちとは背景が本質的に異なることに彼らは気づいているので、結局は、生徒たちに「道德みたい」「説教くさい」「つまらない」という印象を残してしまいがちなのであろう。

## 2. 授業の構成

そこで、上記の打開を目指し、大学生の『論語』や「孔子」の見方を変えていくことを目指した授業を構成した。授業計画は以下のとおりである。

### 【授業計画（全 15 回）】

- 第 1 回：『論語』について。成立と構成、時代背景を概観する。
- 第 2 回：「孔子」について。生涯や人柄、中島敦『弟子』を通してみる。
- 第 3 回～第 4 回：授業者選定の章句の紹介と発表したい章句の選定。  
章句選定の観点は、①学校教材の基本的なもの、②弟子との対話を描いたもの、③既成の孔子観を壊すものとした。授業者が訓読文を読み上げ、学生は内容を現代語訳で確認しつつ担当したい章句に目星を付けておき、第 5 回までに二つ選ぶ。
- 第 5 回：担当章句の決定及び章句の調べ方や発表レジュメの作成方法  
注釈書と参考文献の紹介。テキストは A 金谷治『論語』（岩波文庫）、B 吉田賢抗『論語』（新釈漢文大系）、C 土田健次郎『論語集注』（東洋文庫）の

3種を用い、本文異同と解釈の問題点を挙げる。章句の選定理由と自分の解釈を説明する。章句を教材化する。

第6回～第14回:学生の発表と質疑応答

レジュメの項目は、①テキストABCの本文注釈の提示 ②異同 ③解釈の相違 ④参考文献の紹介 ⑤問題点 ⑥本章句の選定理由と自分の解釈 ⑦教材化の提案 ⑧参考文献。質疑応答では、「発表メモ」用紙（①発表のポイント ②コメント<評価・助言・質問>）を活用し、話し手（焦点化・反応）、聞き手（応答・問い）が双方向で本質的な対話ができるように受講者同士で工夫を重ねた。

第15回:まとめ

井波律子氏の講演資料（『論語』の世界）を用いながら、孔子の人となりについてまとめを行った。発表の際にまとめた「発表メモ」を交流し、自分の課題について再確認を行った。

### 3. 授業者選定の『論語』の章句

時間的余裕があれば、事前に『論語』前文を通読することが望ましい。しかし、限られた時間の中で『論語』すべてに目を通すことは難しい。そこで、授業者が『論語』の章句を予め選定し、それを2回（180分）で、提示していくことを考えた。選んだ章句は156句（全512句）である。

章句選定の観点は以下の3点である。

- ① 学校教材として基本的なもの（かつ、できるだけ具体的なもの）
- ② 弟子との対話を描いたもの（孔子と弟子との人間関係が窺えるもの）
- ③ 既成の孔子観を壊すもの（聖人君子ではない人間性が垣間見られるもの）

授業では、授業者が選定した章句の訓読文を読み上げ、学生は内容を現代語訳で確認しつつ担当したい章句に目星を付け、第五回までに自分が発表したい章句を二つ選ぶ。その際、選定理由を明らかにするとことと、必要ならば授業者選定章句以外も選定可能なこととした。

#### 【授業者選定の『論語』の章句】

- ・学而 第一 1,3,4,8,14,15,16, (6)
- ・為政 第二 2,4,6,7,11,14,15,17,18,24, (10)
- ・八佾 第三 1,3,15,23,25, (5)
- ・里仁 第四 3,8,12,15,16,23,25, (7)
- ・公冶長 第五 7,9,10,14,20,25,26, (7)
- ・雍也 第六 3,11,12,20,21,23,28, (7)
- ・述而 第七 1,3,5,8,10,13,18,20,21,24, (10)
- ・泰伯 第八 8,10,13,14,16,17, (6)
- ・子罕 第九 1,2,4,6,7,8,10,11,12,15,18,20,22,25,27,30,32, (17)
- ・郷党 第十 9,12,13,20,23, (5)
- ・先進 第十一 1,4,7,8,9,10,11,12,13,15,16,18,21,23,25,26, (16)
- ・顔淵 第十二 1,2,4,5,7,12,16,22,23, (9)
- ・子路 第十三 1,3,5,17,18,21,23,26,27,28,29, (11)

- ・ 憲問 第十四 3,4,8,11,21,23,24,25,30,40, ( 1 0 )
- ・ 衛霊公 第十五 2,4,8,12,16,21,24,27,30,31,36,41,42, ( 1 3 )
- ・ 季氏 第十六 4,13, ( 2 )
- ・ 陽貨 第十七 2,4,8,17,20,25,26, ( 7 )
- ・ 微子 第十八 4,5, ( 2 )
- ・ 子張 第十九 8,9,10, ( 3 )
- ・ 堯曰 第二十 2,4,5, ( 3 )

2回の授業を終えた学生の感想をいくつか記す。

- ・ R 抜粋したものを聞いたただけだが、それでも「いいな」と思うところが多数あった。一通り読んでみたいと感じた。
- ・ D 孔子は弟子への返答を一つ一つ丁寧に述べている。そこに孔子の魅力があるのだと思う。
- ・ V 「なるほど」「追究してみたい」と思った文章がたくさんあった。
- ・ U 『論語』は自分のためになる感じはしなかったが、遠い世界の話として「純粋に面白い」と思った。
- ・ F 中島敦の『弟子』と併せて読むと、子路が本当に微笑ましく思います。塩漬けのものが食べられなくなった孔子を思うと胸が痛みます。
- ・ T 孔子の子ども「鯉」のことも気になったが、孔子の妻や家族についても気になった。家族構成のことも調べてみたい。孔子の家族に対する愛とか接し方や出会いなど非常に興味があります。
- ・ I 「子曰、不患人之不己知、患己不知人也」が最も印象的で「人を知らないことに気をかけてるんだ」というのは「他者理解」にとって大切なことである。
- ・ W たくさんの内容に触れる中で、孔子や子路、顔回のストーリーはそれぞれ個性的で面白かった。
- ・ P 格言名言を残しているが、決して偉そうな踏ん返り返った人物ではなく、弟子たちとの距離も近く慕われていたことが分かった。
- ・ P 『論語』は、2500年も前のものなので、学者などによっても見解が分かれ、また、時代も国も違う私たちとは感覚的に異なる部分も多いと思う。
- ・ 弟子たちのことを「激しい言葉で言い切っている」ところが新鮮だった。
- ・ 為政第二 17 がソクラテスの「無知の知」と非常に似ていると感じた。
- ・ 聞いたことがある言葉も、話の前後を読むと解釈が変わってくると感じた。

授業前のアンケートで「つまらない」「堅苦しい」と答えてきた学生たちの意識が少しずつ変わってきたのを見てとることができるであろう。学生の感想には言及がなかったが、章句の中に、孔子と「音楽」の関係に言及するもの（八佾第三 01, 03, 23, 述而第七 13 等）も選んでおいた。孔子が考えていた「音楽」と政治の関係、今日の「音楽」との違いに注目することが孔子の政治思想を考える根幹となると考えたからである。

#### 4. 学生選定の『論語』の章句

学生は、授業者選定の章句から二つを選んだ。その二つをよく吟味して、発表する章句を一つに決めた。その際、章句選定の理由を明確にすることを確認した。

【学生選定の『論語』の章句】 ○が付いたものが発表章句。

- ・ A ○衛霊公第十五 30・ 里仁 第四 25
- ・ B ○学而 第一 03・ 泰伯 第八 08
- ・ D ○学而 第一 16・ 子路 第十三 18
- ・ E 学而 第一 04・ ○衛霊公第十五 30
- ・ F ○学而 第一 08・ 為政 第二 18
- ・ G 学而 第一 04・ ○八佾 第三 01
- ・ H 学而 第一 15・ ○為政 第二 11
- ・ I ○学而 第一 16・ 子罕 第九 22
- ・ J ○為政 第二 06・ 顔淵 第十二 23
- ・ K 為政 第二 15・ ○堯白 第二十 03
- ・ L ○為政 第二 17・ 子路 第十三 29
- ・ M ○八佾 第三 01・ 公冶長第五 26
- ・ N ○里仁 第四 08・ 為政 第二 14
- ・ O 里仁 第四 25・ ○為政 第二 14
- ・ P ○公冶長第五 26・ 先進 第十一 18
- ・ Q ○公冶長第五 14・ 泰伯 第八 05
- ・ R ○述而 第七 21・ 陽貨 第十七 08
- ・ S 泰伯 第八 08・ ○衛霊公第十五 08
- ・ T 先進 第十一 11・ ○子路 第十三 18
- ・ U 顔淵 第十二 12・ ○堯白 第二十 04
- ・ V ○衛霊公第十五 24・ 陽貨 第十七 08
- ・ W ○陽貨 第十七 18・ 堯白 第二十 04
- ・ X 子張 第十九 10・ ○衛霊公第十五 24

以上から、学生は、雍也第六、郷党第十、憲問第十四、季氏第十六、微子第十八以外のすべてから広く章句を選んでいることがわかる。

#### 5. 学生はどんな発表をしたのか。

学生たちはどんな議論や解釈をしたのか。主なものを記す。

- ・ **A E 衛霊公第十五 30 子曰、過而不改、是謂過矣、**

◆過ちのあとの対処によって新たな過ちをうむことがある。◆顔回の「過ちを弼びせず」に注目して、「過ちの上に過ちを重ねることはない」という解釈があることを知った。◆孔子の考える本当の過ちとは何か、孔子はどんな過ちをしたのか、知りたくなった。◆過ちに関する他の章句（『孟子』等）も引用していたので、比較して考えることができた。

- ・ **B 学而第一 03 子曰、巧言令色、鮮矣仁、**

◆この章句は誰に向けられて発せられたものなのか。王か弟子か孔子自身なのか。

◆巧言令色と仁との関係性が難しい。巧言令色は本当に悪いことなのか。◆上辺だけで捉えず本心で向き合うことが大切だという解釈が提案授業に生きていた。

・D 学而第一 16 子曰，不患人之不己知，患不知人也，

◆この言葉は，孔子自身が認められなかったところから出ているのだろう。◆他者がいてはじめて自己が形成される。自分を見つめ直すには他者理解に努めるべきであるという解釈は孔子の思いだろうか。◆孔子の「負け惜しみ」的な発言に聞こえる。◆誰に対してのメッセージだろうか，弟子か孔子自身か。

・F 学而第一 08 子曰，君子不重則不威，學則不固，主忠信，無友不如己者，過則勿憚改，

◆最初「自分より劣ったものを友とするな」という考えに冷たいイメージを持ったが，「尊敬の念を持って親しくしている人こそが友だ」という前向きな解釈ができることを知った。◆現代の友の価値観との相違について考察したい。◆「人の欠点ではなく美点が見つけられる人になろう」というメッセージが伝わった。

・GM 八佾第三 01 孔子謂季氏，八佾舞於庭，是可忍也，孰不可忍也，

◆怒りをあらわにした孔子の姿に興味を持ち，時代背景を踏まえた発表であった。◆孔子と礼楽の結びつきを考えさせられた。◆章句の背景をどのように設定するかで解釈が違ってくる。◆「謂」には孔子の怒りが込められている。◆季氏が孔子を煽っているという解釈も成り立つ。◆八佾の舞の意味が礼楽と政治との関係を考えさせられた。◆誰に対して怒っているのか。怒る孔子の人間性が伝わった。

・H 為政第二 11 子曰，温故而知新，可以為師矣，

◆師となる資質，歴史から知恵を学び，未来へとつなげていくことが分かった。

◆自分が考えたこと＝故，自分が「今」考えたこと＝新

・J 為政第二 06 孟武伯問孝，子曰，父母唯其疾之憂，

◆「孝」とは「父母から子への心配なのか」「子から父母への心配なのか」◆直接的であっても間接的であっても親を喜ばせること，安心させることが親孝行なのだと思った。◆「其疾」の解釈は，会話の背景によって変わってくる。

・K 堯白第二十 03 孔子曰，不知命，無以為君子也，不知禮，無以立也，不知言，無以知人也，

◆「命」「礼」「言」が君子の三条件であるが，それぞれの概念や関係性の把握が難しい。◆「正」「邪」を決めるのは誰か，どのように決めるのかは大きな課題だ。◆天命とは，運命＋人の本性＋使命と自分の生きる意義。

・L 為政第二 17 子曰，由，誨女知之乎，知之為知之，不知為不知，是知也，

◆「知」と「智」の違い。◆子路の人となり。◆ソクラテスの「無知の知」との比較。

・N 里仁第四 08 子曰，朝聞道，夕死可矣，

◆明確にできないものであり，孔子自身も答えがわからないもの。◆「道」を具体的なものとして明確にするのではなく，抽象的概念で捉えるのが最も落ち着く。

・O 為政第二四 14 子曰，君子周而不比，小人比而不周，

◆この章句が「広く公平に関わることの大切さ」だけを主張しているのではないので，解釈については多様性が生じる。◆他者との関わり方についての教え。◆

解釈する人の違いは解釈の違いをうむ。◆君子は感情をコントロールできる人、小人は感情をコントロールできないから、落ち着かない。

・P 公冶長 26 顔淵季路侍。子曰。盍各言爾志。子路曰。願車馬衣輕裘。與朋友共。敝之而無憾。顔淵曰。願無伐善。無施勞。子路曰。願聞子之志。子曰。老者安之。朋友信之。少者懷之。

◆顔淵，子路，孔子の個性がそれぞれの「志」にあらわれていること。◆孔子の「志」は現代の人権の考え方にも通じるものがある。◆弟子の人柄を重んじる。

・Q 公冶長第五 14 子路有聞，未之能行，唯恐有聞，

◆大学生の生活に置き換えて解釈されていた。◆子路の性格に焦点が当たっていた。◆「唯恐」とあるが子路は何について恐れているのか。自分自身に対する評価か，師からの評価か。◆一度に多くのことをできない人は共感できる章句。

・R 述而第七 21 子曰，三人行，必有我師焉，擇其善者而從之，其不善者而改之，  
◆孔子の学びの場や師とは誰かを考えさせてくれる。◆自己研鑽するためには3人居れば十分だという視点は新鮮だ。◆学ぶ機会を自ら作り出していく孔子独自の視点が窺える。◆人の汚点と美点を自分に反映させる。◆生涯教育的視点だ。

・S 衛靈公第十五 08 子曰，可與言，而不與之言，失人，不可與言，而與之言，失言，知者不失人，亦不失言，

◆自分で相手，場所，時間を選んで話をするべきだ。◆「人」とは話している相手の信頼のことか，話している自分自身の徳のことか。◆「知者」とは誰か。

・T 子路第十三 18 葉公語孔子曰，吾黨有直躬者，其父攘羊，而子證之，孔子曰，吾黨之直者異於是，父爲子隱，子爲父隱，直在其中矣，

◆「正直（せいちよく）」とは何か考えさせられた。◆正直とは，「正しいと思うことを行っているか」と捉えた。◆正直とは家族の絆を優先すること。◆儒家と法家の思想について触れていた。

・U 堯白第二十 04（前略）子張曰，何謂四惡，子曰，不教而殺，謂之虐，不戒視成，謂之暴，慢令致期，謂之賊，猶之與人也，出納之吝，謂之有司，

◆選定理由が自分の日常生活に通じるものがあると考えた点が面白かった。◆私たちは教師を目指す身として「四惡」をしていないか，立ち止まって考える必要がある。◆教師や親であっても人としてよくない行いをする可能性があることを学校の授業で教えるべきことなのか。◆批判的に見ることの大切さを知った。

・VX 衛靈公第十五 24 子貢問曰，有一言而可以終身行之者乎，子曰，其恕乎，己所不欲，勿施於人，

◆「恕」とは利害関係に基づかない純粹な心配り，思いやり。◆「恕」は人の嫌がることはしないという否定（勿）から始まる。◆「恕」という漢字の成り立ちから考えたのが面白い。◆「恕」はゆるすこと。◆子貢の性格に応じて「恕」と答えた孔子。◆西洋流積極的道德との比較。

・W 陽貨第十七 18 子曰，惡紫之奪朱也，惡鄭聲之亂雅樂也，惡利口之覆邦家者，  
◆孔子は正当な伝統を大切にしていた。◆孔子の考えをすべて良しとするのではなく，時代の流れを客観的に捉えた発表だった。◆なぜ孔子は鄭の音楽や間色を嫌っているのか本質的なことが分からない。◆「口達者なものが国家をひっくり



返すこと」と間色と鄭声と政治の関係がつかめない。◆新しい文化（紫・鄭声・邪）と旧文化（朱・雅楽・正）の対立か。◆孔子にも柔軟性が必要であった。

## 6. 学生の『論語』観の変容

最後に授業後の学生たちのまとめから、その変容を見てみたい。

- ・ K 孔子について知ってみたい
- ・ B 現代社会や自分自身にもあてはまることが多く距離感がとても縮まった。
- ・ M 説得力のある問答で、読めば読むほど味が出てくるもの。
- ・ R 「孔子」は苦勞を重ねて政治や役人に執着したが、願い叶わず教育者として優れた役人を育てようとした。政治に対して未練が窺える側面をもつ人物。
- ・ C 八佾の舞を見て怒ったり、正が邪に負けることを憎んだり、五徳を重んじ、その実現のためなら時には人を叱る一貫した態度をとる人。
- ・ I 自分自身の日常生活と比較しながら、自己を見つめ直すことができた。思いやり、親切さ、怒りを示す孔子の人間味あふれる態度に共感する時もあった。孔子の素顔を読み取るのは難しい。論語の中に孔子のユーモアや不屈の精神を読み取れば、論語の概要を掴むことができるであろう。
- ・ L 孔子は人間臭く、好き嫌いがあり情緒豊か。各章句を時代背景や弟子の人格と絡めて読みこむと面白いエピソードのようで楽しむ事ができた。
- ・ Q 孔子の考え（正しさも正しくないことも）を批判的に考えられることができた。孔子の考えが現代に通じる所もあり、それが今でも『論語』が扱われている理由と理解できた。
- ・ E 孔子の弟子への愛情、時には嘆き、怒り、冗談も言う人間らしい一面に触れ、自分にとって身近に感じられるようになった。
- ・ U 孔子の考えは今でも生活の中に取り入れられるものと分かり、孔子の偉大さが分かった。顔回の死を嘆き悲しむなど、俗っぽい一面もあって身近に感じるようになった。
- ・ S 孔子には感情的になる部分も見られ人間味あふれる人。『論語』の解釈も政治との関わりの中で、より多様な解釈が認められると知った。日常生活や教職にも具体化できる。
- ・ G 弟子の性格を知り、冗談を言ったり怒ったりする姿から人間らしさを知ることができた。弟子一人一人に対して異なる受け答えをする姿が印象的だった。
- ・ V 章句には隠された時代背景やエピソードがあることを知り、孔子は神のような存在ではなく、現代を生きる私たちと同じように怒ったり泣いたり笑ったりして様々な経験をする中で多くを学びそれを言葉にして伝えた人物であることが分かった。
- ・ A 現代に通じる内容と人生において何が重要か、何に気をつければよいのかが分かった。時代背景が戦乱の世の中であるということもわかった。
- ・ F 孔子と弟子たちのやりとりから孔子の人間らしさを知り、孔子を身近に感じられるようになった。章句の解釈も無条件肯定ではなく、時代を経て現代の考え方にはそぐわないものもあり、そのことを当然として受け止め、自分なりに

咀嚼したり解釈したりすることが必要なものであることも分かった。

- ・O 冗談を交えて、伝えたいことを述べていたり、共感できる内容が多く孔子が授業を通じて近い存在に感じた。
- ・J 孔子 ユニークな一面、怒りを表す人間らしさ。弟子の性格や特徴を把握した上で、教えを説いていたこと、私たちにとって身近な話題もあった。
- ・T 孔子の思想の背景、論語が単なる道徳を説いたものではないことがわかった。孔子の弟子への愛情、弟子の性格を読むことが面白く、人間味あふれる思想家孔子へと認識が変わった。課題は世界史的な見方で見ることと諸子百家とも関係づけて見ることである。
- ・X 授業を通して、イメージは少しよくなった。孔子は自らに常に厳しい姿勢を持っていることに意外性を覚えた。孔子は常識的なことが完全にできる人である。孔子の教えは、孔子が為し得ようとしたことであって、それを万人に当てはめることはいささか無理である。孔子の言葉や偉業をたたえることなく、どうして今でもそれが評価されているかを考える授業を作っていきたい。
- ・W 人間らしさや私たちと同じように孔子にも苦悩があったと思った。
- ・P 孔子のお茶目な一面。弟子によって物事の伝え方を考慮する愛情（親しみやすい）。人間としての温かみを感じた。
- ・H 孔子も感情に左右されることもある人物。自らを律し他人を慈しむことがよりよい社会を形成し、次世代につなげていくことができると思う。
- ・N 怒りを表すところに人間味を感じた。孔子が自分の信念を持ち、弟子たちに伝えていることは、あくまでも孔子の「感じたこと」でしかないと思うようになった。しかし、それだからこそ、この仁徳が表れている文に人々は今も魅力を感じるのだと感じた。

## 7. おわりに

孔子に人間的な魅力を感じた理由として、学生の多くが喜怒哀楽の表出、弟子の性格や傾向を掴んで教えを説くことを挙げていた。また、章句単独での解釈は成り立たず、その背景を考えること、現代の自分たちの価値観との違いを念頭に置いた上で、批判的に『論語』を読み解いていくこと、そうすることで、『論語』の考え方を自分たちの生活の中にも活かしていくことができるものと捉えていた。『論語』の中の未知の章句に出会い、仲間とともに語り合うこと、そこから自己変容の新しい萌芽が生まれつつあると考えられるのではなかろうか。紙面が尽きたので、学生たちが行った章句の教材化については稿を改めて検討したい。

## 参考文献

- ・金谷 治『論語』 岩波文庫 1999年
- ・吉田賢抗『論語』新釈漢文大系 明治書院 1960年
- ・土田健次郎『論語集注1～4』 平凡社 2015年

**謝辞** 『論語』の学びを深めてくださった2017年度前期漢文学演習ⅡB受講生の皆様に感謝致します。